

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

講義および実習前後の看護学生の精神障がい者に対する認識の変化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ISHITOBI, Mariko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/574">https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/574</a>

## 講義および実習前後の看護学生の 精神障がい者に対する認識の変化

福岡県 福岡大学医学部看護学科  
○黒髪 恵 石飛マリコ 焼山和憲

### Summary

目的：精神障害に関する講義前，講義終了後，実習終了後において，看護学生の精神障がい者に対する社会的距離の変化を調査し，講義，実習での体験で看護学生の精神障がい者に対する認識の変化を検討する。

方法：質問紙を用いた量的研究で，精神障がい者に対する認識について講義や臨地実習の前後の変化を比較する横断的比較型研究である。A大学医学部看護学科2年次学生107名を対象に，講義前，講義終了後，実習終了後に星越ら（1994）が作成した社会的距離調査票<sup>1)</sup>を用いて調査を実施した。

結果：調査対象者107名のうち，3回すべての調査に協力が得られ，かつ有効回答であったのは，84名（78.5%）であった。

1. 講義および実習と教育課程が進むにつれて，精神障がい者に対する肯定的な認識に変化する学生が増加した。
2. 質問項目8項目のうち3項目について学生の変化に有意の差があった。有意の差があった質問項目は，同じ地域の中に施設ができたり，同じ地区で奉仕活動をする，あるいは，精神障がい者を自分の会社で雇うという項目であり，同じ地域の中という社会的距離に関して肯定できる学生が増加した。
3. 家族が精神障がい者と結婚あるいは交際すると言った近接的な社会的距離に関しては，講義および実習後でも変化はなく，肯定的に考える学生は，半数以下のままであった。
4. 講義前より肯定的に考える学生が多い項目に関しては，講義，実習を経ても変化なく肯定的な認識は継続した。
5. 有意の差は，講義前と実習後に見られ，講義による精神障がい者の理解だけでなく，実習による接触体験の両方によって変化が見られた。

結論：講義，実習での体験により，精神障がい者に対して肯定的に認識する学生の割合は増加した。一方で，家族が交際するあるいは結婚するといったより近接的な社会的距離に関しては，肯定する学生の割合は半数以下で，講義，実習を通して変化は見られなかった。

### Key Words

精神障がい者 看護学生 社会的距離

はじめに

厚生労働省は、精神障がい者に対する医療福祉施策において入院中心の医療から地域社会支援へと移行することを明らかにしている。精神障がい者の社会参加には、地域社会の精神障がい者に対する肯定的な認識が不可欠である。

精神障がい者に対する地域住民のスティグマに関する研究では、国内1800名を対象とした調査で精神疾患に対する認識があいまいなものであることや偏見や差別というより、実際接する際に戸惑いを感じるものが多いことを示唆している<sup>2)</sup>。ほかの調査においても地域住民の啓発活動の重要性を示唆している<sup>3)</sup>。

精神障がい者に対する正しい認識の普及啓発において、看護職が果たす役割は大きく、看護基礎教育において、精神障がい者に対する肯定的な認識をいかに涵養していくかが課題である。

近年の研究では、看護学生の精神障がい者に対する認識について、講義や実習で肯定的に変化したという結果がある<sup>4,9)</sup>。しかし、ほとんどが、講義、実習それぞれの評価であり、講義から実習にかけての変化を調査したものは少ない。そこで本研究では、精神障害に関する講義、精神科臨床地実習での体験が学生の精神障害に対する認識にどのような変化をもたらすか検討した。本研究は、精神看護における基礎教育での講義、実習指導のあり方について示唆を得るための基礎的データとして位置づけた。

## I. 研究目的

精神障害に関する講義前、講義終了後、実習終了後において、看護学生の精神障がい者に対する社会的距離の変化を調査し、講義、実習での体験で看護学生の精神障がい者に対する認識の変化を検討する。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、質問紙を用いた量的研究である。精神障がい者に対する認識について、講義や臨床地実習の前後の変化を比較する横断的比較型研究である。

2. 調査対象者：A大学医学部看護学科2年次学生（以下、学生）107名である。

3. 調査期間：2008年12月～2010年3月

4. 調査方法：第1回調査前に、研究概要と期間、調査回数、倫理的配慮について説明し、調査用紙を配布した。学内に鍵がかかる設置箱を設置し回

収した。匿名化するために、研究者が配布した無作為の番号を回答用紙に記載し、回答を求めた。

5. 調査時期：第1回調査、精神障害に関する講義前とし、2年次後期に実施した（以下、講義前）。

第2回調査、精神障害に関する講義終了時および実習前調査とし、3年次前期に実施した（以下、講義後）。

第3回調査、精神看護学実習終了後とし、3年次後期の実習（旧デイケア実習を含む2週間の病棟実習）終了日に実施した（以下、実習後）。

6. 調査内容：

1) 対象個人の特性として、①年齢、②性別、③過去に精神障がい者との接触体験があるかについて質問した。

2) 社会的距離測定については、星越ら（2005）が作成した社会的距離調査票<sup>10)</sup>を用いた（表1）。この尺度は精神科病院勤務者を対象に行った調査をもとに尺度開発され、精神障がい者に対する社会的態度を測定するために用いられる。看護学生の精神障がい者に対する認識の変化が見えやすく、先行研究との比較も可能であるためこの尺度を使用した。

社会的距離調査票は、精神科入院歴があるAさんが社会復帰しようとしている場面で「同じ地区にAさんの社会復帰施設ができたらどうするか」など8項目の質問に対して、賛成、どちらかといえば賛成、どちらかといえば反対、反対など肯定から否定の4段階で回答する。

表1 社会的距離調査票の設問内容<sup>10)</sup>

精神科に入院歴があり、退院後は外来で主治医の指導を受け社会復帰しようとしている「Aさん」について、以下の質問にお答えください	
項目1	あなたと同じ地区にAさんの施設ができるとしたらどうしますか？
項目2	あなたが経営者で人を雇うとしたら、Aさんを雇ってあげますか？
項目3	あなたはAさんが同じ地区の奉仕活動に参加するとしたらどうしますか？
項目4	あなたの家に空き部屋があるとしたら、Aさんに貸してあげますか？
項目5	あなたの子供がAさんと結婚したいと言ったらどうしますか？
項目6	あなたはAさんと職場が同じだとしたら、楽しく働くことができますか？
項目7	あなたの家族の誰かがAさんと交際するとしたらどうしますか？
項目8	あなたの家の近所にAさんが家を借りて済むとしたらどうしますか？

7. 分析方法：

1) 個人特性（性別、年齢、過去の精神障害者との接触体験の有無）については、単純集計し、集団の概要を示すデータとした。

2) 講義前、講義後、実習後の各群のどの項目に

差があったのかを確認するために、各質問項目の回答者数を集計し、分割表を作成した。

3)  $m \times n$  分割表検定の調整化残差を用いて分析した。調整化残差は正規分布に近似するので 1.96 以上について特徴があるデータとした。

4) 「賛成」「どちらかといえば賛成」を賛成と考える人として人数割合を算出し、各質問項目での特徴を確認した。

記述統計および統計解析には統計ソフト Excel 2007 で簡易プログラムを作成し、使用した。

### 8. 調査における倫理的配慮

調査を行う前に、対象者には調査の目的、調査期間、調査時期、調査内容、調査方法について、さらに調査参加の有無によって不利益を被らないこと、途中で中断も可能であることを紙面と口頭で説明した。個人が特定されないように、回答用紙には研究者が配布した無作為の番号を記入してもらい、データは鍵がかかる場所に研究者が保管した。また研究参加の有無がわからないように、全体に配布し、鍵のかかる回収箱を設置して回収した。回答用紙の投函を持って同意とした。本研究は研究者が所属する福岡大学医学部医の倫理審査委員会の承認を得ている。

## III. 結果

### 1. 調査対象者の概要

調査対象者 107 名のうち、3 回すべての調査に協力が得られ、かつ有効回答であったのは、84 名 (78.5%) であった。

全員が女子学生であった。調査開始時の年齢は、19 歳～26 歳、ほとんどが 19 歳と 20 歳 (92.8%) であった。

開始時に、精神障がい者と接した経験がある学生は 17 名 (20.2%)、接した経験がない学生が 67 名 (79.8%) であった。

### 2. 講義前、講義後、実習後の得点の比較

調整化残差において有意な差がみられたのは、8 項目中 3 項目で、項目 1、項目 2、項目 3 であった (表 2)。調整化残差で特徴があった値は、項目 1 では、講義前の「どちらかといえば反対」が [2.2831]、実習後の「賛成」が [2.4932] であった。項目 1 では、講義前は「どちらかといえば反対」と答えた学生が多く、実習終了後には、賛成と答えた学生が多かった。

表 2 各質問項目の回答者数と調整化残差分析結果

単位=人 [ ] 調整化残差値 n = 84

項目	時期	回答者数			調整化残差値	有意差
		賛成	どちらか といえば 賛成	どちらか といえば 反対		
項目 1	講義前	28	42	14	0	自由度 6
	講義後	38	38	8	1	有意の差 0.05
	実習後	50	30	4	0	
項目 2	講義前	5	38	34	6	自由度 6
	講義後	7	44	30	3	有意の差 0.05
	実習後	12	53	19	0	
項目 3	講義前	47	31	6	0	自由度 4
	講義後	55	27	2	0	有意の差 0.005
	実習後	58	24	2	0	
項目 4	講義前	13	39	28	4	自由度 6
	講義後	12	42	25	4	有意の差 なし
	実習後	22	44	17	1	
項目 5	講義前	9	23	39	13	自由度 6
	講義後	7	25	42	10	有意の差 なし
	実習後	7	30	39	8	
項目 6	講義前	34	41	8	1	自由度 6
	講義後	42	35	7	0	有意の差 なし
	実習後	50	30	3	0	
項目 7	講義前	8	32	35	9	自由度 6
	講義後	13	32	33	6	有意の差 なし
	実習後	10	31	38	5	
項目 8	講義前	30	38	16	0	自由度 6
	講義後	32	40	11	1	有意の差 なし
	実習後	38	39	6	1	

注：表は各質問項目における回答者数と [ ] 内に調整化残差値を示す。調整化残差分析値は絶対値 1.96 以上が意味のある数値としてマークしている。1.96 以上は、回答者数が多い特徴を示し、-1.96 以下は、回答者数が少ない特徴を示す。

全体的に各群に有意差がみられたのは、項目 1 から項目 3 であった。

項目 2 では、実習前に「反対」が [2.1686] であり、実習後は、「どちらかといえば反対」が [-2.1235]、「反対」が [-2.1276] であった。実習前は「反対」と答えた学生が多く、実習後は、「どちらかといえば反対」「反対」と答えた学生が少ないことがわかる。

項目3では、講義前は「どちらかといえば賛成」が[4.5838]、「どちらかといえば反対」が[3.2280]であり、講義後は「賛成」が[317.9175]、「どちらかといえば賛成」が[-16.1327]であった。実習後は「賛成」が[317.9175]で、「どちらかといえば賛成」が[-5.2478]であった。講義前は「どちらかといえば賛成」「どちらかといえば反対」と答えた学生が多く、講義後および実習後では「賛成」と答えた学生が多かった。

### 3. 各項目「賛成」および「どちらかといえば賛成」と答えた学生数の割合(表3)

ほぼ全項目において、講義前から講義後、実習後と教育課程が進むにつれて「賛成」および「どちらかといえば賛成」と答えた学生数の割合は増加していた。

項目4、項目5、項目6、項目7、項目8については、各群とも有意な差はなかった。賛成と考える学生の割合を算出した結果、講義前、講義後、実習後の割合が、項目5では38.09%、38.10%、44.05%と半数以下であった。項目7では、講義前、講義後、実習後の割合が、47.61%、53.57%、48.81%といずれも50%前後であった。

表3 講義前・講義後・実習後の賛成と考えた人数と割合

	講義前	講義後	実習後	
項目1	70 (83.33)	70 (89.29)	80 (95.28)	*
項目2	43 (51.19)	51 (60.71)	65 (77.38)	*
項目3	78 (92.85)	82 (97.62)	82 (97.62)	*
項目4	52 (61.90)	54 (64.29)	66 (78.57)	
項目5	32 (38.09)	32 (38.10)	37 (44.05)	
項目6	75 (89.28)	77 (91.67)	80 (95.24)	
項目7	40 (47.61)	45 (53.57)	41 (48.81)	
項目8	68 (80.95)	72 (85.71)	77 (91.67)	

注：各質問項目において賛成またはどちらかといえば賛成に回答した人数と割合を示す。

\*調整化残差分析において、有意な差がみられた項目である。

## IV. 考察

全体的に講義および実習によって、賛成と考える割合が増加しており、精神障がい者に対して肯定的にとらえることに関する教育効果は示唆された。

変化が見られた項目1～3は、講義前に比べ実習後に肯定的な認識に変化していた。この項目は、同じ地域の中に精神障がい者がいることや仕事を一緒にするといった項目で、講義および実習の両方の経験によって変化することができた学生が多かった。また、項目1と項目2に関しては、講義後の変化なく、実習後に変化がみられている。つまり正しい知識の習得だけではなく、接触する体験があることで変化があったといえる。項目3の地区活動では、講義後に肯定的な変化が見られ、

実習後も同じ傾向が続いた。講義形式によって、精神障害を理解することは、精神障がい者に対する肯定的な認識へ変容する効果はあるが、実習によって接触体験をもつことで、さらに効果が高いことがわかった。

有意差がなかった項目についてみると、項目5と7は賛成する学生の割合が半数前後および半数以下で経過していた。項目5と7は、自分の家族が精神障がい者と結婚するまたは交際するといった項目であり、比較的近い社会的距離に関しては、講義、実習前後で低いまま変化できていないことがわかる。この結果は、伊東らの調査とは違う結果であった。Guttmanスケールによって調査された伊東らの研究<sup>11)</sup>では、2日間の共同作業所での実習が含まれており、友人関係、親戚関係を持つところまで受容していた。障害をもちながらも地域で生活する姿を見ることでの影響が考えられ実習の場や内容によっても差が生じると推測される。

また、実習期間で比較した原口らの調査では、作業療法士養成学校の学生を対象としていたが、3週間の短期実習よりも2か月の長期実習のほうが、より接触密度が濃い内容に好意的に変化していたと報告している<sup>12)</sup>。原口らは、長期実習において患者と学生がともに作業活動を行い、協同体験をすることが影響していると分析している。

看護学生は、実習において患者と生活をともにするため、接触密度は濃い実習である。しかし、今回ある一定の範囲での変化にとどまっており、実習期間だけではなく、患者と共有できた時間の長さ、共有した内容、学生自身が患者と過ごすことで感じたこと、患者を通して自己洞察した内容など実習での体験内容が影響していることが推測される。どのような体験によって変化が生じるか今回のデータでは検証できなかったが、今後詳細な分析が必要である。

項目6と8は80%から90%の学生が賛成しており各群の変化がない状況であった。精神障がい者と同じ職場で働くことや近所に住むことに関しては、元々賛成している学生が多いといえる。専門的知識や接触体験とは関係なく、学生は否定的にとらえない傾向があることがわかった。また元々肯定的にとらえている項目において、講義や実習の体験で、肯定的な認識が継続されていた。

## V. 結論

1. 講義および実習と教育課程が進むにつれて、精神障がい者に対する肯定的な認識を持つ学生が

増加した。

2. 質問項目8項目のうち3項目について学生の変化に有意の差があった。有意の差があった質問項目は、同じ地域の中に施設ができたり、同じ地区で奉仕活動をする、あるいは、精神障がい者を自分の会社で雇うという項目であり、同じ地域の中という社会的距離に関して肯定できる学生が増加した。

3. 家族が精神障がい者と結婚あるいは交際するといった比較的近い社会的距離に関しては、講義および実習後でも変化はなく、肯定的に考える学生は、半数以下のままであった。

4. 講義前より肯定的に考える学生が多い項目に関しては、講義、実習を経ても変化なく肯定的な認識は継続した。

5. 有意な変化は、講義前と実習後に見られ、講義による精神障がい者の理解だけでなく、実習による接触体験の両方によって変化が見られた。

#### VI. 研究の限界

本研究では、社会的距離調査票の回答内容による比較により、看護学生の変化を比較した。看護学生個人の要因（年齢、性別、個人の経験内容など）との比較や実習における体験内容、精神障害に対する認識の状況など関連要因との比較は調査できていない。教育のあり方について検討していくために、学生個人の要因や学習効果などとも比較していく必要がある。

#### 引用・参考文献

- 1) 星越活彦, 州脇寛他: 精神病院勤務者の精神障害者に対する社会的態度調査 - 香川県下の単科精神病院勤務者を対象として, 日本社会精神医学会雑誌, 2(2), p 93 - 104, 1994.
- 2) 望月美栄子, 山崎喜比古他: こころの病を持つ人々への地域住民のスティグマおよび社会的態度 - 全国サンプル調査から, 厚生学の指標, 55(12), p 6 - 15, 2008.
- 3) 谷岡哲也, 浦西由美他: 住民の精神障害者に対する意識調査 - 精神障害者との出会いの経験と精神障害者に対するイメージ, 香川大学看護学雑誌, 11(1), p 65 - 74, 2007.
- 4) 田島瑛子, 下里誠二: 看護学生の精神障害者に対するイメージに影響を及ぼす実習体験, 日本看護研究学会雑誌, 30(3), p 169, 2007.
- 5) 北岡(東口)和代, 谷本千恵他: 看護学生の精神障害者への態度の変化 - 講義前から実習後にかけての変化の検討, 日本精神保健看護学会誌, 12(1), p 78 - 84, 2003.
- 6) 石田真知子, 柏倉栄子他: 精神看護実習における学生 - 患者間の対人距離の変化, 東北大学保健学科紀要, 13(2), p 157 - 164, 2004.
- 7) 石毛奈緒子, 林直樹: 看護学生の「精神障害者」に対するイメージ - 精神保健の講義による変化, 日本社会精神医学会雑誌, 9(1), p 11 - 21, 2000.
- 8) 栗本一美他: 精神疾患患者と接しての学生のイメージの変化と学び - 精神看護学実習を体験して, 新見公立短期大学紀要, 24, p 171 - 180, 2003.
- 9) 古川照美: 精神看護学実習における看護学生の自己洞察について, 弘前大学医学部保健学科紀要, 2, p 27 - 36, 2003.
- 10) 星越活彦: 精神障害者に対する看護学生の社会的態度, 臨床精神医学, 34(3), p 357 - 363, 2005.
- 11) 伊東由賀, 山崎美晴, 永利美花他: 精神障害者に対する看護学生の態度の変化, 日本保健科学学会誌, 7(4), p 241 - 249, 2005.
- 12) 原口健三, 前田正治, 内野俊郎他: 精神障害者に対する偏見・スティグマの研究 - 精神科実習は精神障害者に対する社会的距離を縮めるか?, 作業療法, 25(5), p 439 - 447, 2006.